

第一章 逃げ出した仔馬

少し前からギユスターヴ・モーパッサンという男に言い寄られているロール・ル・ポワトヴァンは、胸に不安を抱きながら自問していた。結婚の申し出を承諾するべきだろうか、それとも断るべきだろうか？ 彼女は二十五歳、美人で、整った顔立ちと毅然とした目つき、真ん中で分けた褐色の豊かな髪が巻き毛になって顔の両側に垂れている。知的で意志の強そうな様子が周囲の者に強い印象を与えていた。彼女は文学に夢中になり、読むにふさわしいものは何でも読んだし、イタリア語と英語ができてシエークスピアを読み漁り、親しい者には物悲しい調子の手紙を書き、兄アルフレッドを熱烈に称賛していた。アルフレッドはギユスターヴ・フロベールの親友であり、早熟で趣味が良く、反抗的で陰鬱な気質の詩人だった。彼はフロベールと一緒に容赦なくブルジョアをこきおろしていた。ロールは兄たちの議論や遊びや悪ふざけに加わったものだった。二人は彼女の批評眼を評価し、彼女のほうでは、彼らには輝かしい将来が待っていると確信していた。この二人の例外的な人物と並べると、

求婚者のギユスターヴ・モーパッサンに存在感があるとは言えなかった。たしかに彼は魅力的で品が良く、物腰は柔らかいし、ビロードのような目のお蔭で多くの女性を惹きつけていた。しかしながらこの呑気で気ままなダンディーは、知的な面では自分を満足させてくれないのではないかと、とロールは心配していた。それに彼は貴族じゃない！ 彼女は自分が平民でしかないこと、破産した紡績工場主の娘であることが嫌だった。父が亡くなった後、母のヴィクトワールは、フェカンの町の庶民的な地区にある母親の家に子どもたちと一緒に移っていた。ロールは思いあがった気持ちに捕われて、この田舎の凡庸さから逃げ出したい、社交界で認められたい、地位ある人々から賞讃される人物になりたいと願っていたのだ。彼女は頑なに主張し、ギユスターヴ・モーパッサンに古文書を漁って家系を調べるように要求した。幸いにも、ジャン・バティスト・モーパッサンという国務評定官兼秘書官が、一七五二年に貴族に叙されており、証拠としてオーストリアの宮廷から交付された免状が見つかった。ロールはただちにギユスターヴに向かって、公式に貴族の小辞を付ける権利を請求するように求めた。彼がそれをやり遂げたら結婚することしよう。ギユスターヴ・モーパッサンはおとなしく言うことを聞いて手続きを行い、一八四六年七月、ルーアンの民事裁判所は、以後ギユスターヴ・ド・モーパッサンと名乗ることを許可した。婚約者は大喜びし、結婚するのにもう何の障害も認めなかった。

結婚式は一八四六年十一月九日に行われた。同年、ロールの兄アルフレッドは、ギユスターヴ・ド・モーパッサンの妹ルイーズと結婚する。両家は二重の婚姻関係によって一層緊密に結びつくことになった。だが、アルフレッド・ル・ポワトヴァンは絶望と放蕩ほうとうの短い生涯を終え、一八四八年に亡くなる。ロールは悲嘆に暮れた。運命のこの不公平さを前にして、慰めといえばショーペンハウアーを読むことくらいだった。この哲学者の悲観主義は彼女の抱く人間の定めについての苦い見方に応えてくれた。けれどもすぐに、暗い気分は大きな喜びによって一掃される。妊娠したのだ。生まれてくる子どもは天才に違いない。この子はフェカンのような、彼女自身の

言葉でいう「商人と塩漬け職人」の住む村なんかで生まれるわけにはゆかない。家族が住むスル⁽²⁾・ボワ通りの家はあまり立派でないだけにおさらだった。折よく前年、すなわち一八四九年九月に、モーパッサン家はディエップから遠くないトゥール维尔⁽³⁾・シユル⁽⁴⁾・アルク市に属している、ミロメニルの豪華な城館を借りたところだった。若妻は妊娠期間の終わる前にこの貴族的な屋敷に居を移した。その館はかつてはフレール侯爵、次いでミロメニル大元帥が所有したものであった。数キロ離れたところに住んでいたギトン博士が、最初の陣痛の時から出産に立ち会った。新生児は戸籍原簿に、アンリ⁽⁵⁾・ルネ⁽⁶⁾・アルベール⁽⁷⁾・ギイ⁽⁸⁾・ド⁽⁹⁾・モーパッサン、一八五〇年八月五日、トゥール维尔⁽¹⁰⁾・シユル⁽¹¹⁾・アルク市、ミロメニルの城館にて出生と登録された。同年八月二十日に略式洗礼を授かり、一年後の一八五一年八月十七日、同じ教区の教会で洗礼を受けた。しかしながら村には奇妙な噂が流れる。悪意を持った誰かが主張するには、実際には赤子はフェカンで生まれたのであり（ふん、なんて凡庸な！）、ロールがミロメニルの城館に移ったのは産後の祝別式の後だったのに、トゥール维尔⁽¹²⁾・シユル⁽¹³⁾・アルクの役場と折り合いをつけて公式の証書に偽の出生地を記させたというのである。感情的な母親であったロールは、生涯にわたってこの侮辱的な説を否定し続けることになる。一八五六年、二番目の息子エルヴェの誕生に際しても、彼女はル⁽¹⁴⁾・アーヴル郡、グラン维尔⁽¹⁵⁾・イモ⁽¹⁶⁾・ヴィル所在の城館を選んで借りている。彼女の胸のうちでは、子どもたちが幼い頃からとても古い壁、高価な家具、先祖の肖像画に囲まれて育つことが重要だったのだ⁽¹⁷⁾。もっとも、貴族の邸宅に愛着を抱いていたからといって、若夫婦が頻繁にフェカン、エトルタ、パリに滞在する妨げにはならなかった。とりわけ血気盛んなギユスター⁽¹⁸⁾・ヴはじつとしていられた。家にいると退屈で、気晴らしに娘たちを追いかけた。尻軽な女や若い女中、みんな結構。面倒のないこうした女たちと一緒にいると、高慢で怒りっぽく、威圧的で、知的な事柄にばかり関心を向ける妻に対する苛立ちから癒やされるのだった。ロールは夫の浮気を知っていて、さんざんに不平を漏らし、彼を非難した。時折、子どもたちは諍⁽¹⁹⁾いを漏れ聞いた

し、漠然とながらもその原因を察知していた。

一八五九年、財産に不運が起こり、それまで呑気だったギユスターヴ・ド・モーパッサンは職探しを余儀なくされた。最初は公認仲買人エドゥアル・ジュールの事務所に副会計係として、次にパリのシュトルツ銀行に社員として勤め、家族全員が首都に転居した。そこでも彼は思う存分にその場限りの情事に耽つた。ロールはもう我慢できなかつた。九歳になつていたギイも、父親は他の女たちに惹かれて家を空けるのだと理解していた。ナポレオン帝室高等学校〔現在のアンリ四世高校〕の寄宿生だつた彼は、母親に書き送っている。「僕は作文で一等賞でした。X夫人はご褒美にパパと一緒にサーカスに連れていってくれました。彼女はパパにもご褒美をあげているようだつたけれど、何のご褒美かは分かりませんでした。」また別の日、ギイとエルヴェは子ども向けの昼の出し物に誘われた。招待した婦人が父の愛人であることは周知の事実だつた。エルヴェは病気だつたので、ロールは残つて看病することにした。ギユスターヴ・ド・モーパッサンは自分がギイをお祭りに連れていこうと熱心に申し出した。おてんばな少年はからかうつもりで服を着るのをぐずぐずしていた。苛立つた父親は外出をやめにするぞといつて少年を脅した。

「ああ！」と、ギイは答えた。「僕はぜんぜん平気だよ！ 僕よりパパのほうが行きたがつてるみたいだね！」

「さあさあ、靴紐を結ぶんだ」と、父親は言つた。

「やだよ、ここへ来て結んでよ！ それにさ、ぐずぐずしないで決心したほうがいいよ。」

ギユスターヴ・ド・モーパッサンはばつが悪そうな顔をしながら言うことを聞いたのだった。それからしばらくして、ギイは両親の激しい争いを目にして恐怖に襲われた。彼はある短編小説のなかでそのことを回想している。「その時に父さんは、怒りに震えながら振り返つて母さんの首をつかむと、反対の手で力一杯顔を叩き出した。母さんの帽子が飛び、解けた髪が広がった。母さんは打擲をかわそうとするけれども叶わなかつた。そして

父さんは狂ったように叩きに叩いていた……。僕には世界が終わりを迎え、永遠不変の法則が変わってしまったかのように思われた……。子どもだった僕の頭は錯乱して慌てふためいた。僕は力一杯叫び出した。なぜだか分からぬまま、恐怖、苦しみ、恐ろしい動揺に捕われていた。「恐怖からパニックになったギイは庭に逃げ込み、おののきながら夜を明かした。翌日、彼は「いつも通りの顔をした」両親に会う。嵐は消え去り、両親は生気のない夫婦の習慣を取り戻す。ロールは息子を引き寄せてため息を漏らすばかりだった。「聞き分けのない子ね、どれほど怖かったでしょう！ 寝ないで夜を過ごしたのよ。」

口論と和解を繰り返すうちに、家庭の雰囲気は耐えがたいものになっていった。ギユスターヴはもう妻と肉体的関係を持たず、妻のほうでは辛抱が限界を迎え、ついに別れることを決心した。当時、離婚は法律上認められていなかったもので、治安判事を前にして簡易証書による示談でことは決着した。ロールは自分の財産を取り戻し、子どもの養育権を得たうえ、子どもたちのために夫から年千六百フランの仕送りを受け取るようになった。だがこの離縁にもかかわらず、浮気な夫に対する母親の恨みをギイが共有することはなかった。両親の不和によって若い時分から、どんな結婚も失敗する定めにあると確信したのである。彼の考えでは男というものは、毎日毎晩同じ女と一緒にいるようにできてはいないのだ。彼は母親を哀れに思いながらも、父親のことを理解したいという思いに強く駆られていた。何年もの間、父に対して軽蔑まじりの寛大な気持ちを抱き続けることになる。

両親は別れる前にエトルタに別荘「ヴェルギー」荘を購入していた。フェカンへ行く通りの下に位置する十八世紀の大きな建物だ。ロールは子どもたちと一緒にそこへ引きこもった。カバノキ、シナノキ、カエデ、モチノキが植えられた広い庭が、白く塗られた「愛しい家」を取り囲んでいる。バルコニーはツタやスイカズラで覆われていた。内部では家に伝わる重々しい家具が蟬とラヴェンダーの匂いに包まれて眠り、薄暗がりのなかでルーアン焼きの陶器が壁に輝いていた。ギイはこの豪華で厳めしい装飾のなかで母親から教育を受けた。彼女は息子

に詩への好みを植えつけ、大きな声で『真夏の夜の夢』や『マクベス』を読んで聞かせた。早逝した詩人にして繊細な文学者だった伯父アルフレッドに息子が似ているのを確かめると胸が一杯になった。一八六二年のある日、彼女はフロベールから献辞つきの『サラムボー』を贈られた。熱い思いを抑えられずに、夕食の後、偉大な友人の最新作の一節を子どもたちに朗読して聞かせた。「息子のギイも注意深く聞いていました」と、彼女は作家に書き送っている。「しばしばとても優美で、時々は恐ろしいあなたの描写が息子の黒い目に閃光を走らせました。」⁽⁶⁾ギイはその時十二歳だった。ああ！息子も作家になればいいのに！とロールは思った。

この文学的で情熱のこもった教育を補ったのは、エトルタの助任司祭、「大柄で骨ばっており、体はがっしりしていて考えははつきりしている」⁽⁷⁾オブル神父だった。彼はギイとエルヴェに文法、算数、教理問答、ラテン語の基礎を教えた。そして彼岸の概念に馴染ませるために、墓地の「黒い木の十字架の上に書かれた」死者の名前を暗記させた。だが少年たちの心に強い印象を与えるにはそれ以上のことが必要だっただろう。授業が終わるとギイは浜辺へ逃げてゆき、胸いっぱい強い海風を吸い込み、カモメの鋭い鳴き声を聞き、漁師たちとおしゃべりした。エルヴェはこうした遠出にはついてこなかった。ギイより六歳年下の弟には兄と似たところがなく、二人は真にお互いを理解することのないままに一緒に暮らしていた。ロールは次男よりも長男のほうを愛していた。ギイのうちに知的でたくましく、それでいて芸術の誘惑にも敏感という、自分の心に適う男の姿を見ていたのだ。ギイはノルマンディーの方言を流暢に話した。遊び仲間は地元の少年たちであり、彼らは元気が良くて勇敢で、ほとんど教育を受けていなかった。彼はこの陽気な貧しい子どもたちと自分との間にどんな違いも感じていなかった。帆と風に対する情熱が彼らを結びつけていたのだ。時折、漁師が「モーパッサン少年」を舟に乗せてくれた。海が荒れていればいるほどギイは冒険に夢中になる。十三歳でボートの舵を握り、適切な瞬間に傾かせ、後部が沈み込む時にもう一度舟を持ちあげることができた。自然の力と格闘していると激しい喜びに満たさ

れるのだった。子ども時代の気ままな遠出を思い出しながら、成熟に達した彼は述べている。「私の血管には海賊の血が流れている」と。

彼が惹きつけられたのは海だけではなく、ノルマンディーの内陸部もお気に入りの土地だった。リングの木に囲まれた家屋敷、乾いた葦が生えた沼地、農家の中庭と吠える犬が好きだった。農民たちの顔は記憶のなかに写真のような正確さで記録されていた。苦勞に耐え、吝嗇で、ずる賢いと同時に素直でもあるといった彼らの性格を見抜いていた。オブル神父の言葉よりも、彼らの言葉に注意して耳を傾けていた。

この原始的な社会のすぐそばにエトルタの町があった。町は一八五〇年頃にアルフォンス・カルルのお蔭で流氷の場所となり、春の訪れと共にブルジョアや芸術家たちで溢れるのだった。エレガントな婦人たちが子どもや家庭教師を連れて砂利の浜辺に降りてくると、日傘の下で海を眺めながらうっとりとして夢想に耽る。男たちはカジノへ行き——木造の質素な建物である——ビリヤードに興じ、新聞を読む。お茶の時間には、通りがかりのピアニストがオッフエンバックのアリアを弾くのを聴いた。若者が「ダンスパーティー」を開催すると、落ち着いた感性の持ち主は「アンティークの間」と呼ばれる部屋に避難する。こうした暇を持て余して豊かな生活を送る軽薄な人々と、彼らを取り囲んでいる垢じみて無知だが自信に満ちた地元住民との間には溝が存在していた。ギイはためらうことなく慎ましい者たちの側にいた。彼は骨の髄までノルマンディー人だったし、そうであり続けるつもりだった。

息子が海岸沿いを散歩するだけで満足している時には、ロールがよく一緒になった。ある日、上げ潮に襲われたので、二人は切り立った崖をあがって命からがら波を逃れた。一緒に危険を切り抜けたという思いで互いに結びつけられ、二人は岩の頂きで抱き合った。人間の世界から遠く離れ、カモメの激しい喚き声に包まれながら崇高な瞬間だった。ロールは荒々しい自然に対する崇拜の念を息子と共有し、ギイは「逃げ出した仔馬」のよう

に、自分の好きなように生きさせてくれる母に感謝した。

二人が生き続ける限り、このような親密な関係が続くことをロールは望んでいた。けれども、家でオブルー神父から受けるものよりもっと真面目な教育を考えなければならなかった。彼女はいやいやながらギイを寄宿学校に入れることに決めた。高潔さについての自分の考えに忠実に、エトルタ近郊のイヴトーの神学校に息子を入れることにした。こうすれば身分の低い人たちについての知識に加えて、社交界でキャリアを築こうとする者には不可欠な、見栄えの良い上品な作法を身に付けられるでしょう、と彼女は考えたのだった。